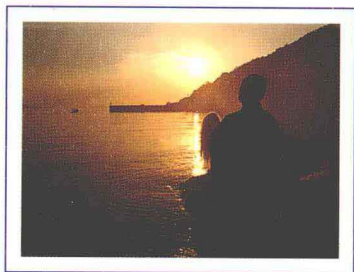


大 往生 の島

佐野眞一
Sano Shinichi

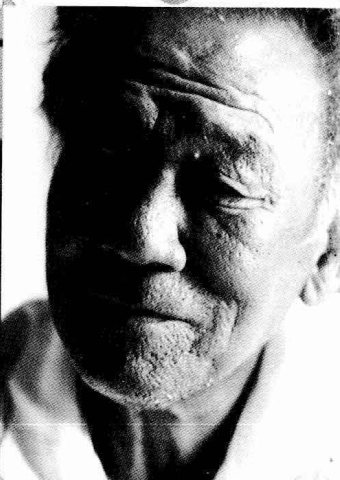
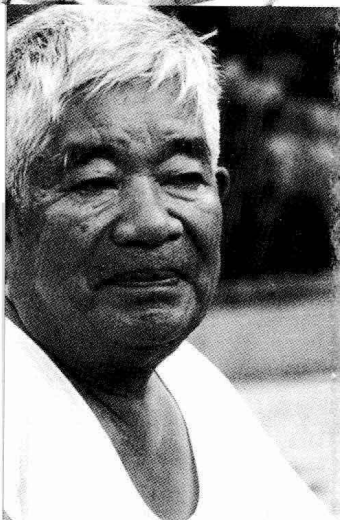




大往生の島

Sano Shinichi
佐野眞一

文藝春秋



著者略歴

1947(昭和22)年、東京に生まれる。69年早稲田大学文学部卒業。出版社勤務を経てノンフィクション作家に。著書に、セックスを視点に日本を捉えた『性の王国』、バブル時代を跳梁した怪物たちに迫った『昭和虚人伝』、新聞の片隅に掲載される三行広告から世紀末の世相をあぶりだした『紙の中の黙示録』、『山びこ学校』の教師・無着成恭と教え子たちのその後の人生をたどった『遠い「山びこ」』、読売王国の礎を築いた正力松太郎を描いた評伝『巨怪伝』等があり、宮本常一と渋沢敬三の民俗学に注ぐ情熱と友愛を描いた前作『旅する巨人』(以上、いずれも文藝春秋刊)で第28回大宅壮一ノンフィクション賞を受賞した。

大往生の島

平成九年十二月二十日

第一刷発行

著者

佐野眞一

発行者

藤沢隆志

発行所

株式会社
文藝春秋

〒102
電話

東京都千代田区紀尾井町三一二三
東京 三二六五―二二一

本文印刷 凸版印刷
製本所 大口製本

*定価はカバーに表示してあります

万一、乱丁落丁の場合は送料当方負担でお取替
えいたします。小社営業部宛お送り下さい

大往生の島
目次

第一章	島へ	7
-----	----	---

第二章	老人と海	47
-----	------	----

第三章	波止の別れ	85
-----	-------	----

第四章	盆に沈む島	135
-----	-------	-----

第五章	支える人びと	181
-----	--------	-----

第六章	墓と寺と海	225
-----	-------	-----

	あとがき	274
--	------	-----

東和町略図・周防大島略図 6

主要参考文献 279

取材協力者・本文写真クレジット 286

装幀

緒方修一

写真提供

岩崎 隆
榎並悦子

大往生の島

島へ

第一章



瀬戸内夕景

松山の三津浜港を出たとき糠のようだった雨は、瀬戸内海に出ると本降りになった。船の窓には間断なく雨滴が流れ、瀬戸内の島々は鼠色に煙っていた。

数脚のテーブルを赤いソファがぐるりと囲んだ広さ十畳ほどの船室では、さきほどから四、五人の老婆たちが貸切りのお座敷列車のようにくつろぎ、思い思い食べ物を取りだしては仲よく分けあって談笑している。

はじけたような大きな笑いの声のなかに、ときおり、どこか愛敬のある山口訛りがまじるのが聞こえる。

彼女たちも私がこれから訪ねる島に行くのだろうか。それともこの船の最終目的地の岩国まで行くのだろうか。

私はひさしぶりに耳にする山口訛りを心地よいバックグラウンド・ミュージックのように聞きながら、東京から松山に向かう飛行機のなかで読みはじめたシナリオに再び目を落とした。

テレビの一時半スペシャルドラマのために書きおろされたそのシナリオは、これから私の向かう島が舞台となっている。

東京で暮らす五十二歳の父親と二十四歳の娘が、このドラマの主人公である。

渡瀬恒彦扮する父親は中堅商社の人事部長として、会社生き残りのため大幅なリストラ計画を命じられている。一方、西田ひかる扮する娘は不登校児などをあずかるメンタルヘルスセンターに勤めている。母親は娘が高一のとき亡くなり、今は二人暮らしである。

ある日、父が会社の首切り役だということを偶然知った娘は猛反発し、これまで父に抱いていたさまざまなすぶった思いを爆発させる。父は自分の故郷や故郷にひとり残してきた母親について一切語ろうとしなかった。娘はそんな父親に冷たさを感じていた。

激した娘は父の故郷を訪ねたい、おばちゃんにも会いたい、といいだす。父は娘の思わぬ態度に狼狽するが、結局、三十八年前に捨ててきた故郷に娘と一緒に行くことを決意する。都会育ちの娘にとって父の故郷はあまりにもものんびりし、まるで時が止まっているようだった。だがそこで過ごすうち、娘はその風景になんともいえない懐かしさのようなものを感じ始める。その思いは、年老いた祖母とのはじめての出会いや、父と幼なじみたちとの再会をみるにつれ、いよいよ募っていく。

故郷でみる父の姿は、東京でみる父とどこか違っていた。父に対する娘のまなざしは、いつしか穏やかなものにかわっていった……。

父と娘がわだかまりを捨てて、“和解”するその故郷が、私がいまから向かう島だった。シナリオはその島に一軒だけある寺の住職が、わざわざコピーして送ってくれたものだった。

私は親子の関係をメインモチーフにして、そこに地方の過疎化や高齢化の問題、都会のリストラや不登校児の問題までもりこみ、さらに娘の淡いラブストーリーまでちりばめた盛りだくさんの内容に、やれやれ、テレビの脚本家という職業も深刻な社会問題から最新風俗まで、いろいろと目配りしなければならぬ大変な商売だなあ、と心の中で苦笑いしながら、数日前、島の住職からかかってきた電話を思い出していた。

住職の話によると、去年の秋、テレビドラマの相談をもちかけられたとき、島の寺までやってきた担当プロデューサーは、赤い傍線が何本もひかれた雑誌記事のコピーをとりだし、この記事を“叩き台”にして脚本をつくりたい、といったという。

私がシナリオを読んで思わず苦笑したのは、彼らが脚本の“叩き台”にしたという雑誌記事とは、実は私がその島をルポして書いた記事だったからである。

杓子定規に言えば、テレビ局は記事を書いた本人に無断でドラマづくりのヒントにしたことになる。しかし私は、そんな話を聞いてもたいして怒る気にならなかった。というのは、やはりある民放テレビ局が私の書いた同じルポを下敷きにして、一時間のドキュメンタリー番組をすでに制作・放映していたからである。

このとき私にその民放テレビ局から事前の連絡だけはあった。しかし要はそれだけで、私はそのときも、目についた記事ならなんでも企画化する彼らのお手軽さと仕事に対するプライドのなさを叱る気にもなれず、やれやれテレビ局というものはよほど企画が払底しているんだな、と考えこんだ。

それにしても、ドキュメンタリーといいドラマといい、彼らはなぜその島にこれほど強い関心を寄せるのだろうか。私にはそのことの方がずっと興味ぶかった。

しかし島の住職からの電話でそれ以上に驚かされたのは、そのテレビドラマに住職自身が、渡瀬恒彦扮する父親の中学時代の同級生役として特別出演すると聞いたことである。島の住職の年齢はたしか私より三つ年下だった。

私がその島を訪ねるのは、実はこれで四度目である。その都度、住職と会い、島の人びとの暮らし向きや死生観について詳しく話を聞いていた。話題は彼自身のこれまでの経歴にも及び、立命館の学生時代、全共闘の一員としてヘルメットをかぶり闘争に参加したことも聞かされていた。年齢は私の方が少し上だが、世代的には同じ全共闘世代である。

団塊の世代ともベビーブーマー世代ともいわれるその同じ世代が、五十二歳の父親の同級生役で出演する。私は急に年をとったように感じ、同時に、訪ねる度になぜか心ひかれるその島について、まとまったものを書いておきたいとあらためて思った。

その気持ちには、自分自身を含めた団塊の世代がいかに老後をすごすのかという不安もか

なり働いていた。ここ数年来、高齢化社会の到来がよくいわれる。高齢化社会の到来とは団塊の世代が一気に老人になる社会のことである。

そして足を運ぶ度、その島が次第に身近になっていくように感じられるのは、おそらくは私のなかに、自分自身が高齢化社会に突入するという思いが濃おちのようにわだかまっていたためだった。詳しくは後から述べるが、その島は高齢化率日本一の島と呼ばれているのである。

雨の船旅はあっという間だった。船足は早く、松山を出て四十分後にはもう目的地の伊保田港に到着した。

伊保田港は、屋代島とも周防大島とも呼ばれるその島の東端に位置している。瀬戸内海では兵庫県の淡路島、香川県の小豆島に次ぐ面積をもつ周防大島は、江戸時代の旧国名からとられたその島名が示すように行政区的には山口県大島郡に属している。

この島は地図でみると金魚のような形をしている。このため、別名金魚島とも呼ばれている。島は四つの町からなり、本州の山口に最も近い金魚の頭の部分が大島町、背が久賀町、腹が橘町、そして四国の愛媛側に最も近接した長い尻尾の部分が東和町という格好になっている。尻尾は大きく上下にわかれ、伊保田港は長くのびた上の尻尾の末端部分に位置している。

平成九（一九九七）年七月一日調べによる島の人口は、大島町七千六百三十五人、久賀町

四千七百十六人、橘町六千百二人、東和町五千五百九十七人、計二万四千五十人となっている。

特筆すべきは、全人口中に占める六十五歳以上の人口、いわゆる高齢化率である。平成九年三月末の調査で、大島町三八・三四パーセント、久賀町三四・三二パーセント、橘町四〇・三二パーセント、東和町四八・一三パーセント、全島平均では四〇・三五パーセントという数字になっている。

平成九年現在、日本全体の高齢化率は一五・一パーセントだから、この島の高齢化率はその二・七倍もあることになる。

市町村別の高齢化率でみると、大島町が全国で三十五位、久賀町が百三十七位、橘町が二十位にランクされている。そして全国平均の三倍以上の高齢化率をもつ東和町は、三重県南端の山村の紀和町や沖繩県の離島、栗国島栗国村などの超過疎地を六ポイント以上ひきはなして日本一の高齢化町となっている。

東和町が日本一の高齢化の町になったのは昭和五十五（一九八〇）年のことである。それ以来この町は十七年間にわたって、高齢化率日本一の座を保っている。

日本全体の高齢化率から割りだせば、日本には現在、六十五歳以上の老人が六・六人に一人居住している。これに対し東和町は人口のほぼ二人に一人が老人で占められ、町民の平均年齢は五六・九九歳にも達している。

ちなみに高齢化率の最も低い自治体は、若年層の人口流入が激しく、東京ディズニーランドがあることで知られる千葉県のパ安市で、その老年人口率は五・五パーセントである。東和町と浦安市との高齢化率の間には、およそ四三パーセントもの差がひらいている。

東京の千代田区、中央区、新宿区をほぼあわせた面積を有する東和町は、山が海にせまって平地は少なく、約五千六百人の居住者は、入江にへばりついたような二十二の集落に分散して暮らしている。

私はこれからその集落の一つ、沖家室おきむろという離島に向かおうとしていた。沖家室は周防大島の属島の一つで、金魚の形にたとえれば、ちょうど下の尻尾にぶらさがったような形で瀬戸内海に浮かんでいる。そのため沖家室島は、周防大島本島との位置関係から、冗談まじりに「金魚のフン」にたとえられることもある。

船中で談笑していた老婆たちは、伊保田を経由して向かう最終寄港地の岩国まで行くのだろう、伊保田で下船したのは私ひとりだった。

雨の船着場にはキップもぎりの中年の女性が、麦藁帽むぎわらをかぶってひとり立っていた。ほとんど会話らしい会話をかわしたことはなかったが、この船便を何度か利用した私にはなじみのある顔だった。

その真っ黒に日焼けした顔に会う度、高齢化率日本一という町に住みながら、そうしたレ